

プ ラ ザ

東京医科大学付属病院の臨床研修医に対する  
漢方医学教育のアンケート調査  
Questionnaire survey on Kampo medical education to medical interns in  
Tokyo Medical University Hospitals

及川哲郎<sup>1)2)</sup> 矢数芳英<sup>1)3)</sup> 渡邊秀裕<sup>1)4)</sup>  
伊藤正裕<sup>1)5)</sup> 平澤一浩<sup>1)6)</sup> 山口佳子<sup>7)</sup>  
平山陽示<sup>2)</sup> 原田芳巳<sup>2)8)</sup>

Tetsuro OIKAWA<sup>1)2)</sup>, Yoshihide YAKAZU<sup>1)3)</sup>, Hidehiro WATANABE<sup>1)4)</sup>,  
Masahiro ITOH<sup>1)5)</sup>, Kazuhiro HIRASAWA<sup>1)6)</sup>, Yoshiko YAMAGUCHI<sup>7)</sup>,  
Yoji HIRAYAMA<sup>2)</sup>, Yoshimi HARADA<sup>2)8)</sup>

<sup>1)</sup>東京医科大学病院漢方医学センター

<sup>2)</sup>東京医科大学病院総合診療科

<sup>3)</sup>東京医科大学病院麻酔科

<sup>4)</sup>東京医科大学病院感染症科

<sup>5)</sup>東京医科大学人体構造学分野

<sup>6)</sup>東京医科大学茨城医療センター耳鼻咽喉科

<sup>7)</sup>東京医科大学八王子医療センター総合診療科

<sup>8)</sup>東京医科大学医学教育学分野

緒 言

東京医科大学では、医学科における講義などの卒業前漢方医学教育と大学病院医師を主な対象とした卒業後漢方医学教育が行われているほか、2019年からは臨床研修医に対する小講義やランチオンセミナーなども開始された。しかし漢方医学に対する臨床研修医の意識に関する研究は少ない。そこで今回、東京医科大学付属病院3施設の臨床研修医に対して、漢方医学教育に対するニーズを探る目的でアンケー

ト調査を行ったので報告する。

対象と方法

1 まず2020年3月に、東京医科大学病院卒業後臨床研修センターに所属する2019年度臨床研修医74名を対象として、漢方医学に関するアンケート調査を実施した。漢方医学に対するイメージ、漢方医学に対する興味の有無、臨床研修中の漢方医学教育の必要性、どのような講義を受けたいか等について質問し、回答を集計・解析した。

令和4年5月12日受付、令和4年6月3日受理

キーワード：臨床研修医、漢方医学教育

(連絡先：〒160-0023 東京都新宿区西新宿6-7-1 東京医科大学病院総合診療科・漢方医学センター 及川哲郎)

TEL : 03-3342-6111 (内線 2152) FAX : 03-3349-6052

2 引き続き2021年3月、東京医科大学附属病院3施設を対象を広げ、東京医科大学病院、同茨城医療センター、同八王子医療センターに勤務する2020年度臨床研修医計102名に対して、漢方医学に関するアンケート調査を行った。臨床研修医所属先の内訳は東京医科大学病院80名、同茨城医療センター9名、同八王子医療センター13名であった。基本的には2019年度と同様のアンケート内容で、漢方医学に対するイメージ、漢方医学に対する興味、臨床研修中の漢方医学教育の必要性、どのような講義を受けたいか等について質問し、回答を集計・解析した。

なお本調査研究は、東京医科大学医学倫理審査委員会の承認を受けている（承認番号T2020-0259）。

## 結 果

### 1 アンケートの回収率

2019年度に行ったアンケートは74名中51名から回答が得られ回収率は69%であった。

2020年度のアンケートについては102名中63名（東京医科大学病院41名、同茨城医療センター9名、同八王子医療センター13名）から回答が得られ、全体の回収率は61.7%であった。

### 2 漢方医学に対するイメージについて（図1）

漢方医学に対するイメージを問うと、2019年度に行ったアンケートでは、西洋医学と異なった良さがある28名、健康増進に適している22名のほか、慢性病に適している17名、伝統に裏打ちされている

る10名、薬害副作用の心配が少ない10名、薬代が安い7名といった回答が得られた。また少数ではあるが薬代が高い3名、非科学的である4名、効果が出るのが遅い3名、医療行為と認めにくい2名という回答もみられた（図1a）。

2020年度のアンケートについては、西洋医学と異なった良さがある46名、健康増進に適している31名のほか、慢性病に適している17名、薬害副作用の心配が少ない16名、伝統に裏打ちされている13名、効果が出るのが遅い13名、薬代が安い8名といった回答が得られた。また少数ではあるが、非科学的である5名、医療行為と認めにくい1名という回答もみられた（図1b）。

### 3 漢方医学に対する興味の有無（図2）

臨床研修医の漢方医学に対する興味を問うと、2019年度については、興味があるが38名、ないが13名で、全体の74.5%は興味があると回答した。興味がある理由としては、西洋薬にない良さがある24名、今後の医療の中に必要14名のほか、セミナーや講演会への参加6名、自分や家族が治療を受け効果を感じた5名、漢方医学に関する本を読んだ5名、植物や自然が好き4名などの回答がみられた（図2a）。同様に2020年度については、興味があるが52名、ないが11名で、全体の82.5%は興味があると回答した。興味がある理由としては、西洋薬にない良さがある38名、今後の医療の中に必要23名のほか、自分や家族が治療を受け効果を感じた15名、植物や自然が好き6名、漢方医学に関する本を読ん

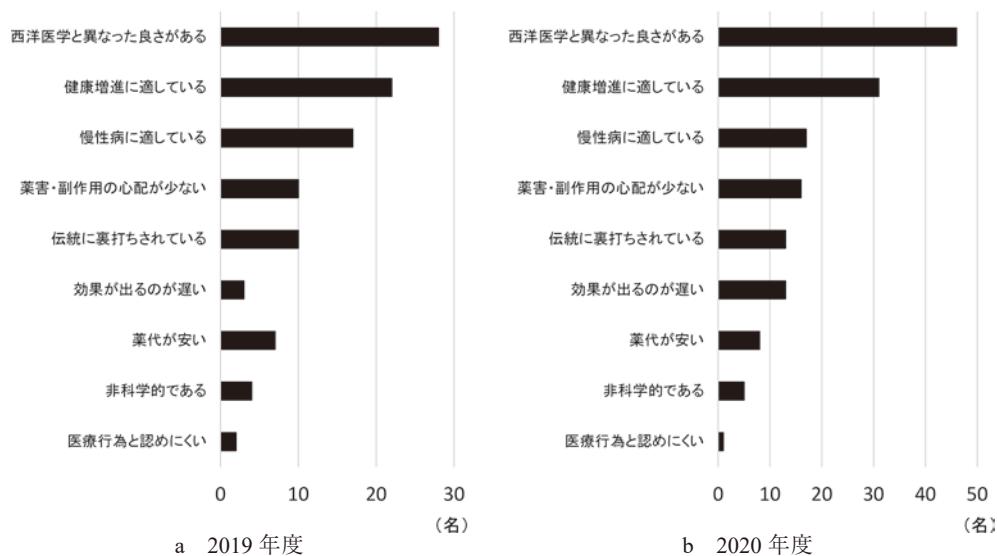


図1 漢方医学に対する臨床研修医のイメージ

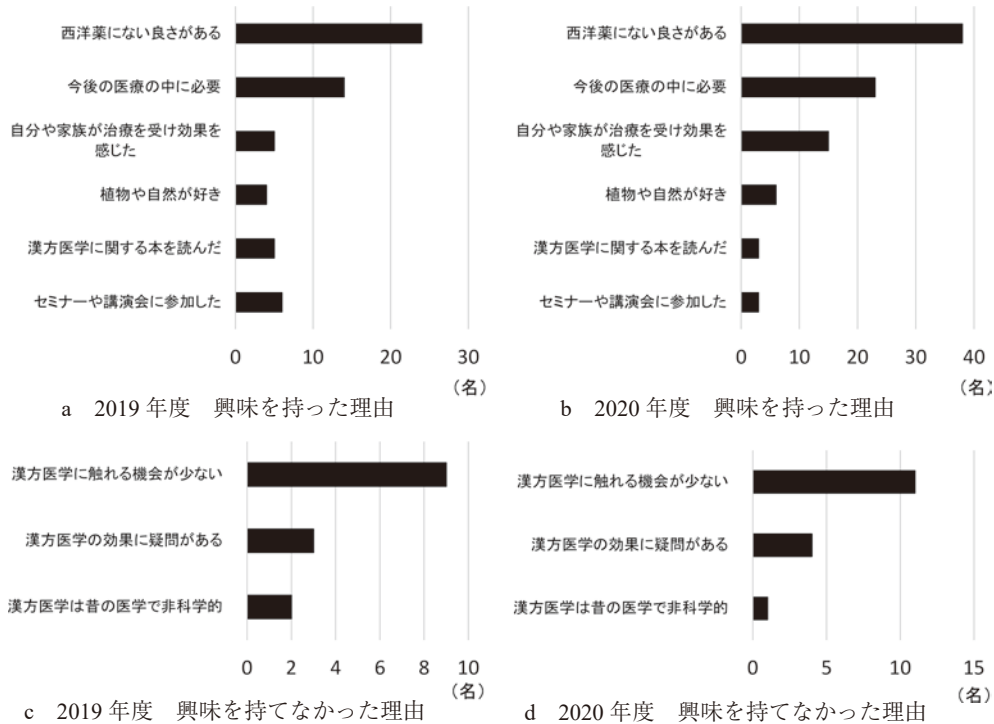


図2 漢方医学に対し興味を持った（または持てなかった）理由

だ3名、セミナーや講演会への参加3名などの回答がみられた（図2b）。

一方で興味を持てなかった理由として、2019年度については漢方医学に触れる機会が少ない9名、漢方医学の効果に疑問がある3名、漢方医学は昔の医学で非科学的2名という回答が得られた（図2c）。同様に2020年度は、漢方医学に触れる機会が少ない11名、漢方医学の効果に疑問がある4名、漢方医学は昔の医学で非科学的1名という回答であった（図2d）。

#### 4 臨床研修中の漢方医学教育の必要性（図3）

臨床研修中の漢方医学教育の必要性を問うと、2019年度のアンケートでは、必要だと思う、もっと増やしても良い13名、必要だと思う、現状程度でよい33名、現状の講義は不要である2名、どちらともいえない3名という回答であった（図3a）。全体として、漢方医学教育が必要だと考える研修医は51名中46名（90.2%）という結果であった。同様に2020年度については、必要だと思う、現状程度でよい33名、必要だと思う、もっと増やしても良い24名、どちらともいえない4名、現状の講義は不要である1名、という回答であった（図3b）。また全体として、漢方医学教育が必要だと考える研修医は63名中57名（90.5%）という結果であった。

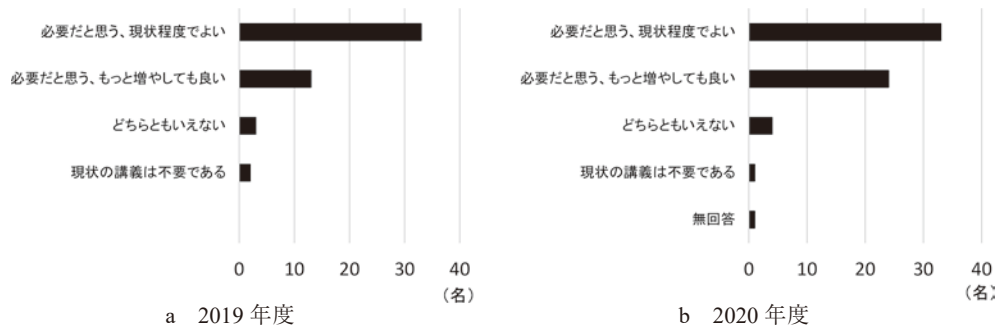
さらに、どのような講義を受けたいかという質問に対しては、2019年度については処方解説が39名、基本知識が33名と多く見られたほか、診断方法（19名）、漢方薬の科学的評価（7名）、鍼灸（2名）、歴史（1名）があげられていた（図3c）。2020年度についても同様に、処方解説が49名、基本知識が43名と多く見られたほか、診断方法（17名）、漢方薬の科学的評価（10名）、鍼灸（4名）、歴史（3名）があげられていた（図3d）。

#### 5 臨床研修中の漢方医学教育の効果など（図4および図5）

臨床研修終了以降、漢方薬を使いたいと思うかの問いには、2019年度のアンケートでは、積極的に使いたい19名、時に使うかもしれない31名と計50名は漢方薬を使いたいと回答し、1名は漢方薬を使うつもりはないと回答した（図4a）。同様に2020年度のアンケートに関しては、時に使うかもしれない36名、積極的に使いたい24名と計60名は漢方薬を使いたいと回答、3名がわからないと回答した（図4b）。漢方薬を使うつもりはないという選択肢も設けたが、2020年度に選択した研修医はいなかった。

また、講義前後で漢方医学に対する考え方が変わったかの問いには、変わらない14名、どちらと

臨床研修中の漢方医学教育の必要性



臨床研修中に受けてたい漢方医学教育の内容

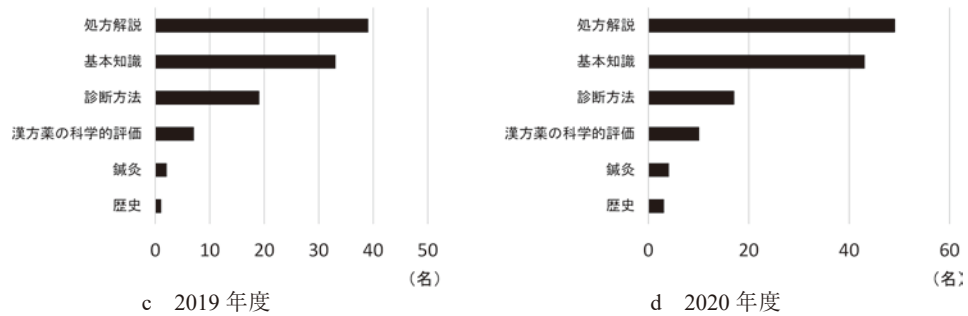
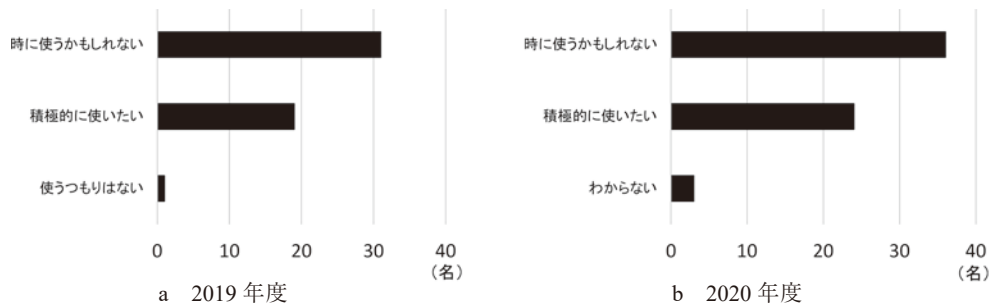


図3 臨床研修中の漢方医学教育の必要性とその内容

後期研修以降の漢方薬の使用希望



講義前後での漢方医学に対する考え方の変化

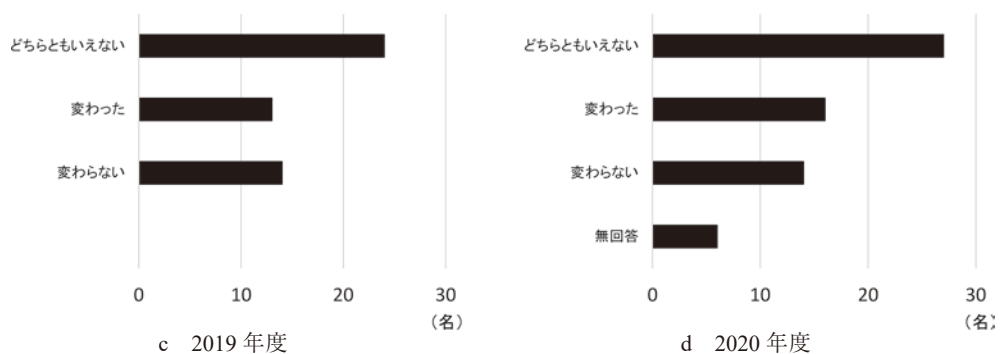


図4 臨床研修中の漢方医学教育の効果などについて

もいえない24名、変わった13名という結果であった(図4c)。具体的に変わった点としては、使い方がわかった、より臨床で処方してみようと思った、治療効果のエビデンスを示してもらえ興味深かった

などの回答が得られた。2020年度については、どちらともいえない27名、変わった16名、変わらない14名、という結果であり(図4d)、具体的に変わった点としては、使い方を学べた、非科学的とって

いたが症状を緩和する理由はあると分かった、ハードルが高いイメージがなくなったなどの回答が得られた。

そのほかにも、2020年度（東京医科大学病院の研修医のみ）のアンケートでは、昼休み各科持ち回りで行うランチョンセミナーの漢方講義は必要か質問したが、必要だと思う・現状程度でよい21名、必要だと思う・もっと増やしても良い15名、どちらともいえない2名、現状の講義は不要である2名、無回答1名という結果であり、おおむね東京医科大学付属病院における漢方医学教育の必要性を問う設問（図3a, b）と同様の回答傾向が見られた（図5）。また総合診療科のローテーション時、41名中10名（24.4%）の臨床研修医が漢方外来に陪席し、8名（19.5%）が漢方カンファレンスに出席していた。

最後に感想、意見、改善点など、臨床研修医が自由記載した文章のうち、今後の漢方医学教育を考えるうえで参考となるコメントを以下に示す。

・西洋医学で言う不定愁訴など、疾患に分類されないが困っている患者さんの訴えの1つの解決策になると思う。ただ考え方のベースが全く違うため、マインドを切り替えるのが大変な気がしてハードルが高いです。

・漢方の講義が不要だとは思いますが、いろいろ詰め込まれてもよくわからないことが多いです。

・漢方医学に非常に興味を持っており、将来何科に進むにせよ、一定期間漢方に関する研修をしっかり受けたいと考えています。学生時代の外来見学や現在の救急外来診療を経験する中で不定愁訴への対

処に苦慮する場面が多く、その際に漢方薬の処方や東洋医学的なアプローチが出来ればと強く感じているのがきっかけです。今後とも漢方医学について継続的に学ぶ機会があれば嬉しいです。

## 考 察

現在の東京医科大学付属病院の臨床研修医に対する漢方医学教育には下記の5つ（表）があげられ、このうち3以外は2019年度以降に開始されたものである。1は東京医科大学付属病院3施設で行われ、2-5は東京医科大学病院のみの実施だが、2については動画の貸出があり、また3についても2021年以降はウェブ配信形式となったため、茨城や八王子の臨床研修医も参加が可能となった。

1 漢方医学講義 月単位でローテーションして行く4-5名の研修医グループごとに60分程度の講義を行っている。内容は総論と治療の実際のほか、気血水や虚実寒熱といった漢方医学の用語説明を含むものである。

2 研修医ランチョンセミナー 東京医科大学病院の研修医向けセミナーとして毎週水曜日の昼休みに行っているもの。頻用処方紹介を中心に各回30分程度、漢方は年2回の講義がある。

3 臨床漢方セミナー 大学病院勤務医師を主な対象に隔月で行っているテーマ毎の生涯教育講座で、臨床研修医も2年間の研修中1回以上の出席を義務付けられている。

このほか希望する臨床研修医は、

4 漢方外来への陪席

5 漢方カンファレンスへの参加

も可能となっている。

現在の卒前医学教育では「医学教育モデル・コア・カリキュラム（平成28年度改訂版）」で「薬物治療の基本原則：漢方医学の特徴や、主な和漢薬（漢方薬）の適応、薬理作用を概説できる」となっている

表 東京医科大学付属病院の臨床研修医に対する漢方医学教育

1	漢方医学講義	60分
2	研修医ランチョンセミナー	30分/回 年2回
3	臨床漢方セミナー	60分/回 研修中1回出席必須
4	漢方外来陪席	東京医科大学病院の希望者のみ
5	漢方カンファレンス参加	東京医科大学病院の希望者のみ

（3以外は2019年度に開始）

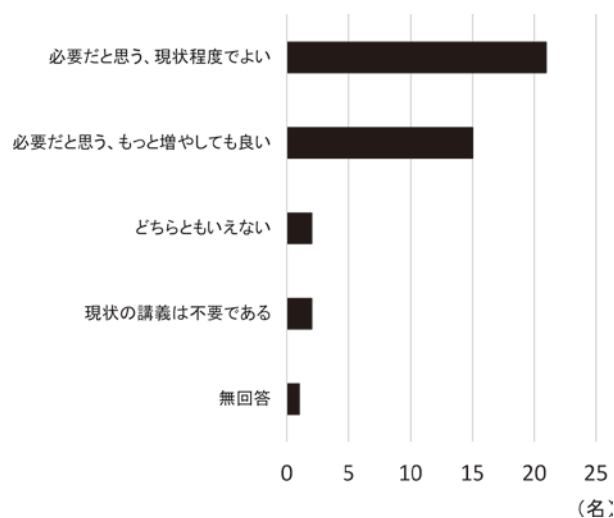


図5 東京医科大学病院研修医ランチョンセミナーでの漢方講義の必要性



が、「医師臨床研修指導ガイドライン—2020年度版—」では到達目標に漢方医学に関する明確な記載がなく、卒前・卒後教育の一貫性の観点から不十分な可能性がある。全国的にみても、医学部での卒前教育と生涯教育を中心とした卒後教育の間に位置する臨床研修医への漢方医学教育は、現状必ずしも十分に行われているとは言えない。そのため、多くの臨床研修医が在籍する大学病院での効果的な教育は重要である。今回の2回にわたる調査結果は、東京医科大学付属病院3施設の臨床研修医がおおむね漢方医学に興味を持ち、漢方医学教育に肯定的な態度を示すものと考えている。

アンケートの各項目についてみていくと、臨床研修医のもつ漢方医学に対するイメージはポジティブなものが多く、漢方医学に対する興味の有無についても80%前後と高い割合の研修医が興味ありと回答した。ただ臨床研修医が習得しなければならない現代医学の知識や技術は、当然ながら非常に多い。それだけに、出来るだけ短時間で効果的に漢方医学を教育するという、教える側の力量が今後は一層問われると考えている。また少人数ではあるが、漢方医学にネガティブなイメージを持つ研修医もいて、漢方薬の効果に疑問を持ったり非科学的と考えていることも分かった。現代医学が臨床的なエビデンスや作用機序研究などを重視した卒前教育を行っていることを考えれば、伝統医学に対してこのような考えをもつ研修医がいることはある意味当然ではある。漢方医学教育もエビデンスや作用機序に関する知見は増えてきており、これらを上手に示しながら、より現代医学的な方向への「間口」を広げた教育を行っていく必要があるとあらためて感じた。

続いて臨床研修中の漢方医学教育の必要性について問うと、両年度とも90%以上の研修医が必要と回答した。これらの結果からは、先の質問で漢方医学に対してネガティブなイメージを持っていたり漢方医学に興味がないと回答した研修医の中にも、臨床研修中の漢方医学教育は必要と考える研修医が一定数（おそらく10%前後）いることが推測され興味深い。彼らは漢方薬が臨床の現場で広く用いられていることを経験し、自分の興味の有無にかかわらず一定の知識を持つておく必要があると考えているのかもしれない。次に同様のアンケート調査を行う機会には、ぜひその理由を尋ねる設問を作りたい。受けたい教育の内容については、やはり処方解説や

基本知識といった実臨床で役立つものを希望する声が多かった。なお高山らは（大学病院での）臨床研修中の漢方教育は91%が必要と回答し、講義や指導の内容として期待されるもので最も多かったのは「日常よくある疾患に対する漢方治療」（70%）であったと、我々と同様の報告を行っている<sup>1)</sup>。小林らも大学以外の臨床研修病院の研修医にアンケートを行い、全員が臨床研修中の漢方教育は必要と回答したと述べている<sup>2)</sup>。すでに表に示したように、東京医科大学では各項目は時間的に短いながらも、バラエティ豊かな漢方医学教育メニューを提供できるようその充実を図ってきた。今後はこれらのメニューを有機的に関連させながら、より効率的に学習できるようさらなる工夫を重ねたい。

臨床研修中の漢方医学教育の効果に関する設問では、回答した研修医の大部分が臨床研修終了以降も漢方薬を使いたいと考えていることが分かった。両年度とも4割程度の臨床研修医が積極的に使いたいと回答していたことから、やはり医療現場における漢方薬のニーズが確かにあることを彼らなりによく理解しているのではないかと推察する。最初の設問で漢方に対する興味がないと回答した臨床研修医は一定数存在したが、漢方薬を使うつもりはないという回答には結びついていなかったことも、それを裏付けていると考えている。おそらく、彼らが将来漢方薬を使うとしてもエビデンスをベースとした使い方限定されると想像できるが、そうであっても漢方薬も治療手段に加えることで医療の質を上げることに貢献できるであろう。漢方医学に関する講義については、両年度とも2～3割の臨床研修医が、講義前後で漢方医学に対する考え方が変わったと回答した。個々のコメントは結果に記したとおりだが、使い方が分かった、漢方薬のエビデンスや特徴を知ることができたといった内容で、すべて良い意味で変わったという回答であった。このことから、現在の限られた時間・内容の講義であっても、臨床研修医に対する一定の教育効果が期待できるのではないかと考えている。

2020年度アンケートでは、東京医科大学病院の研修医ランチョンセミナーの必要性についても問うてみた。結果は東京医科大学付属病院における漢方医学教育の必要性を問う設問と同様の回答傾向で、9割近い研修医が必要と回答した。研修医ランチョンセミナーは、文字通り弁当を食べながら各科

専門医の実践的な講義が気軽に聴講できるとあって人気が高い。漢方医学のランチョンセミナーも頻用処方の実践的な使い方を中心に行っているが、せっかくの機会なので講義だけでなく葛根湯など煎じ薬の実演・試飲を行ったり、時期によっては屠蘇散（正月に飲むいわゆるお屠蘇のことで、生薬を用いており元来は漢方薬である）の説明・配布を行ったりしている。実際のところ、漢方医学は診察方法を含め五感を診療に生かす部分が多いため、今後も漢方薬の味覚や嗅覚も総動員して漢方医学の効果的なインプットを図っていきたいと考えている。

最後に総合診療科のローテーション時、2割前後の研修医が漢方外来に陪席したり漢方カンファに出席したと回答した。ときどき陪席希望の臨床研修医がいると思っていたが、集計してみると意外と多い印象が少々意外であった。陪席や講義の際に彼らに聞いてみると、必ずしも純粋に漢方が好きで勉強したいという者ばかりではなく、むしろ将来産婦人科に進みたいが漢方薬を使いそうだから見ておきたいとか、どんなことをやっているのかと何であれでも覗いてみたい、といった理由が多かったように思う。それでもこちらとしては大歓迎で、漢方治療によって患者さんの症状が改善したり体調が良くなったりするのを間近で見ることは、彼らに少しばかりであっても何がしかのインパクトを与えるのではないかと期待している。

考察を終えるにあたり、もう一点付け加えておきたい。ここ2年余りのコロナ禍の中でウェブ研修会等の増加により、研修医の学修環境は大きく変わりつつある。東京医科大学付属病院3施設における臨床研修医の漢方医学研修環境は、大学病院で漢方医学を教えられる教員が少ないという元々抱えていた問題も含めて、視聴覚教材やWeb会議サービスの普及・利用促進によって改善した部分大きい。例えば東京医科大学病院臨床漢方セミナーは従来と比べ、2021年のウェブ配信開始以降は臨床研修医の参加登録が倍以上と大幅に増えた。また従来は難しかった茨城医療センターや八王子医療センターの臨床研修医も、気軽に臨床漢方セミナーに参加できるようになった。以前は筆者（筆頭著者）が茨城や八

王子に出向き、臨床研修医を集めて講演していたのが唯一の漢方医学の学修機会であったことを考えると大きな進歩である。他の施設ではe-learningを取り入れた漢方医学教育の有用性が報告されており<sup>3)</sup>、河邊も研修環境に依存しないウェブ講演形式の活用を勧めている<sup>4)</sup>。今後我々もウェブ化の利点を最大限に生かし、より効果的な教育へとブラッシュアップしていくつもりである。

以上、東京医科大学付属病院の臨床研修医に対する漢方医学教育について、2年度にわたるアンケート調査結果に基づく考察を交えて報告した。臨床研修中は、研修中の診療科のスケジュールや当直勤務予定の違い、緊急の患者対応などにより、講義1つとっても全員のスケジュールを合わせるのが困難などといった特有の問題点はあるものの、今回の結果を踏まえ、学習意欲が高い臨床研修医に対するさらなる漢方医学教育の充実を図っていききたい。

## 結 語

東京医科大学付属病院の臨床研修医の多くは漢方医学に興味を持ち、漢方医学教育に肯定的な態度を示した。今回の結果を参考としつつ、本学における臨床研修医に対するさらなる漢方医学教育充実を図りたい。

## 利 益 相 反

著者全員について、本論文に関する申告すべき利益相反はない。

## 文 献

- 1) 高山 真、ほか：大学病院における初期研修医の漢方医学教育に対する意識調査。医学教育 **46**：178, 2015
- 2) 小林誠一、ほか：臨床研修病院における研修医への漢方医学教育。日東医誌 **68**：60-65, 2017
- 3) 畝田一司、ほか：e-learning を利用した初期研修医に対する漢方医学教育の試み。医学教育 **51**：207, 2020
- 4) 河邊讓治：漢方薬を臨床で使いはじめた大阪市立大学医学部附属病院群の初期研修医への漢方に関する意識調査（座学講義形式とWEB講義型式）。大阪市医学会雑誌 **70**：43-51, 2021